慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民/難民の移動に関する研究
Sub Title	International migration policies and its impact on the migrants-refugees from the Middle East
Author	錦田, 愛子(Nishikida, Aiko) 森井, 裕一(Morii, Yuichi) 高岡, 豊(Takaoka, Yutaka) 今井, 宏平(Imai, Kohei) 昔農, 英明(Sekinou, Hideaki)
Publisher	
Publication year	2022
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2021.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究では、中東地域からヨーロッパ諸国への移動が多くみられるアラブ系移民 / 難民の中でも、特にパレスチナ難民とシリア難民に焦点を当て、彼らの移動の実態と、そこに国際的な政策協調が与える影響について検討を加えた。FRONTEX (EU国境管理局) を訪問し、人の移動管理に関する協調体制について調査した他、2015年の欧州難民危機で最も多くの難民を受けいれたドイツで、その後の受け入れの実態や社会の変化について検討した。また移民 / 難民の経由地であるレバノンやトルコでは、欧州での受け入れ縮小に伴い、難民の定住や帰還促進に向けた動きが起きていることを明らかにした。 This research investigated dynamics of the Arab migrants-refugees from the Middle East to European countries and influence of the international migration policies toward their movement especially focusing on Palestinian and Syrian refugees. The observation and interviews of the activities of the FRONTEX (European Border and Coast Guard Agency) suggested changing collaboration for the control of human mobility since the refugee crisis in 2015. In Germany, field research was conducted about the accepted Syrian refugees and social change thereafter was clarified. Beside transition of the acceptance in the European countries, its impact for the migrants-refugees was observed in transit countries in the Middle East. Acceleration of either resettlement or repatriation of refugees from Syria by various actors was observed in Lebanon and Turkey. These methods followed the blockade of the new refugees' acceptance after the EU-Turkey agreement and prolonged Syrian conflict.
Notes	研究種目 : 基盤研究 (B) (海外学術調査) 研究期間 : 2017 ~ 2019 課題番号 : 17H04504 研究分野 : 移民/難民研究、中東地域研究
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_17H04504seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０４５０４

研究課題名（和文）中東・ヨーロッパ諸国間の国際政策協調と移民／難民の移動に関する研究

研究課題名（英文）International Migration Policies and its impact on the Migrants-Refugees from the Middle East

研究代表者
錦田　愛子（NISHIKIDA, Aiko）

慶應義塾大学・法学部（三田）・准教授

研究者番号：７０４５１９７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,350,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中東地域からヨーロッパ諸国への移動が多くみられるアラブ系移民／難民の中でも、特にパレスチナ難民とシリア難民に焦点を当て、彼らの移動の実態と、そこに国際的な政策協調が与える影響について検討を加えた。FRONTEX（EU国境管理局）を訪問し、人の移動管理に関する協調体制について調査した他、2015年の欧州難民危機で最も多くの難民を受けいれたドイツで、その後の受け入れの実態や社会の変化について検討した。また移民／難民の経由地であるレバノンやトルコでは、欧州での受け入れ縮小に伴い、難民の定住や帰還促進に向けた動きが起きていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
移民／難民が移動を決める際には、戦争や迫害など窮迫した環境要因や、経済的な意図など移動主体自身のニーズに基づき、一方的に決断がなされると思われがちである。しかし実際には、受け入れ国側の状態や、人の移動をめぐる国際的な政策協調のあり方などから大きな影響を受けること、またその実相が、本研究で明らかにされた。他にも移民／難民の移動先での生活を支えるうえで、各国でNGO等の民間組織の果たす役割が大きいことが分かった。

研究成果の概要（英文）：This research investigated dynamics of the Arab migrants-refugees from the Middle East to European countries and influence of the international migration policies toward their movement especially focusing on Palestinian and Syrian refugees. The observation and interviews of the activities of the FRONTEX (European Border and Coast Guard Agency) suggested changing collaboration for the control of human mobility since the refugee crisis in 2015. In Germany, field research was conducted about the accepted Syrian refugees and social change thereafter was clarified. Beside transition of the acceptance in the European countries, its impact for the migrants-refugees was observed in transit countries in the Middle East. Acceleration of either resettlement or repatriation of refugees from Syria by various actors was observed in Lebanon and Turkey. These methods followed the blockade of the new refugees' acceptance after the EU-Turkey agreement and prolonged Syrian conflict.

研究分野：移民／難民研究、　中東地域研究

キーワード：中東　移民　難民　アラブ　EU　国際協調　受け入れ政策　ドイツ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中東地域からヨーロッパ諸国へ向けた人の移動は、労働移民や政治紛争による難民など複合的な理由により、近年増加傾向が見られる。その一環として 20 世紀半ば以降、パレスチナ・イスラエル紛争をはじめ、イラク戦争やシリア紛争など国際介入を含む大規模な戦闘が起きると、多くの難民が生まれ、その一部はヨーロッパ諸国を目的地に選んだ。移民／難民としての生活は長期化し、国籍を取得し数世代目を迎える者もいる。

こうした人の移動に対して、既存の研究では送り出し側の条件に関心が集中し、受け入れ側の政策が与える影響の実態について、あまり明らかにしてこなかった。だが実際には、各国単位の受け入れ政策のみならず、国際的な政策協調は大きな影響を与えてきた。2016 年の EU-トルコ合意はその顕著な例の一つであり、2015 年に世界的な注目を集めた欧州難民危機は、これにより実質的に終息することとなった。

また移民と難民は、移動をめぐる経済的動機や、政治的迫害・人権侵害といった環境の有無により区別され、別の主体として議論されてきた。だが移動主体に焦点を当てるならば、移動の終着地は偶発的要素に左右され、政治状況や社会資本、移民ネットワークの存在などの変数により、国境を越えた移動は流動的に繰り返される。UNHCR および IOM（国際移住機構）は、こうした複合的な移動を「混合移動（mixed migration）」と呼ぶ。難民がさらに第三国に向けて移民する例も多く、移民と難民の区別は曖昧である。

２．研究の目的

本研究は、このような移動の動態と研究背景を踏まえ、これまで看過されてきた、中東地域からヨーロッパ諸国へ向けた人の移動に国際政策協調が与える影響を明らかにすることを目的とした。紛争等を背景に、自発的に移動を選択して出身地域を離れた人々を「移民／難民」と呼んで総括的に捉え、これらの人々の移動の動向と国際的な政策協調との間にどのような相関関係が存在するのか分析を加えた。

この研究目的のために設定した問いは以下のとおりである。まず、アラブ系移民／難民の受け入れ国･経由国･送り出し国の間では、移動に関するどのような多国間協力の枠組みが構築され、どんな体制で遂行されてきたのか。それらの枠組みの存在や変化は、移民／難民の意識や動態、移動の際の戦略にどのような影響を与えたのか。また移民／難民の実際の移動の動態は、受け入国・経由国・送り出し国の政策形成や政治・社会にどのような影響を与えたのか。こうした人の移動をめぐる相互作用や、多地域間の状況が相互に及ぼす影響について考察する上で、本研究はヨーロッパ側と中東側の両方における調査・研究を通して解明を試みた。

３．研究の方法

本研究では、アラビア語を母語とする国（アラブ諸国）出身の移民／難民の中でも特にシリアとイラク、パレスチナ出身者を主な研究対象として、彼らの移動に国際的な政策協調が与える影響について、政策分析と聞き取り調査を行った。

まずはアラブ系移民／難民がヨーロッパ諸国へ移動する際の経由国と主要な受け入れ国における政策の変化について、当該国の政治学を専門とする研究者との共同研究により検討を加えた。続いて移動主体である移民／難民自身に対してドイツ（受け入れ国）、トルコ、レバノン（経由国）で聞き取り調査を行い、彼らが移動以前に送り出し国でおかれていた法的･社会的地位や、移動の時期、移動経路、移動を決めた契機、移動先の選択理由などを確認した。さらに移動の際の戦略として、移動予定先国での親族の有無を考慮に入れたか、各国の受け入れ政策や国際的な移動規制に関する事前情報を有していたかなどの点についても、聞き取り調査で把握を試みた。

これらの調査・研究は、2015 年に起きた欧州難民危機後の政治・社会的変化の中で行ったため、同時期の受け入れ国・経由国・送り出し国の政策動向や、社会における NGO 等の活動状況も並行して調査・研究の対象とした。研究代表者が長期現地調査を行ったドイツなどでは、当該研究期間は移民／難民の受け入れに対して社会的反発が強まったことで、大きな政策転換がみられた。新規の移民／難民の受け入れ人数も激減する中、受け入れ施設の移転や支援運動の変化についても現地調査を行い、そうした情報が移民／難民の間でどのように共有されていくか、移動への影響について検討を加えた。

本調査では他にも、同じ分野で研究を行うドイツやトルコ、アルメニア等の研究機関との間でも研究交流を行った。日本への研究者招聘による研究会や学会分科会での発表の他、各国での国際学会やシンポジウムでの報告を通して、最新の研究動向について情報交換を行った。

４．研究成果

(1)移動の実現可能性と国際協調の変化

本研究では、主にシリアやイラク、パレスチナ出身の移民／難民について、その移動の動機と経緯に国際的な政策協調がどのような影響を及ぼし得るか検討した。まず明らかになったのは、これらの人々が移動を決めるに際して、移動の実現可能性がきわめて大きな意味をもつという

ことである。単純に紛争に巻き込まれ、危険にさらされるという条件だけで、人は移動を決定するわけではない。トルコやドイツに逃れたアラブ系移民／難民への聞き取り調査からは、体力等の身体的な能力（高齢者や身体に障碍のある人は物理的に避難できないことも多い）、経済力（移動の際に仲介業者等に渡す金額、移動後の生活資金等）、自活可能性（移動先で働けるか否か、または生活を支えてくれる親族の有無）、経路の安全性（特に子連れや体力の弱い女性にとっては重要）に加えて、受け入れ国が移民／難民に対して友好的な政策を取っているか否かは、重要な判断材料の一つとなっていることが分かった。2015 年の欧州難民危機の発生当初は、移動経由地であるバルカン諸国や東欧諸国などで一時的な人の移送に関する国際協調が成立した。そのため移動の実現可能性が非常に高くなり移動主体にとってはコストが低下したため、移動が有力な選択肢となったことが、ドイツでのシリア難民に対する聞き取り調査を通して検証された。また調査では、移動先に仕事があり、生活を支えるだけの収入を得られる蓋然性が高いことも、移動先の選択の条件となっていることが分かった。これらは移民と難民を厳密に区別する研究では得られない知見である。

ヨーロッパ諸国へ向かう移民／難民の受け入れをめぐる政策の変化については、ポーランドのワルシャワで FRONTEX（EU 国境管理局）本部を訪問し、地中海を中心とした移民／難民の救援をめぐる国際協調体制の現状について話を伺った。そこでは、2015 年の難民危機を受けて、移動を保護するための国際協調体制が拡充されていることが確認された。一方で、2016 年の EU-トルコ合意後は、ギリシアに到着する移民／難民がトルコへ強制送還されることとなったため、トルコ・ギリシア間の移動は激減しており、実際の保護件数も激減していることが、ギリシアのレスボス島、イタリア南端のランペドゥーザ島での調査で分かった。とはいえイタリア研究者を交えた研究会では、こうした移動には増減の波があり、特に南地中海ルートに関しては、本研究開始時点では一概に移民／難民の数が減少したとは言い切れないことが指摘された。

(2)主要受け入れ国ドイツの政策変容

欧州難民危機の際に多くのシリア難民を受け入れたドイツでも、本研究期間中には大きな政策の転換がみられた。受け入れを主導したアンゲラ・メルケル首相の率いるキリスト教民主同盟（CDU）への支持は低下し、2017 年の総選挙では移民／難民受け入れに反対を掲げる極右政党「ドイツのための選択肢（AfD）の躍進の陰で得票を減らした。その後の地方自治体選挙でも議席数を減らし、メルケルは CDU 党首を辞任することになった。実際には 2016 年の財政赤字はゼロであり、難民受け入れはドイツにとって大きな経済負担にはならなかったことがうかがわれるが、ドイツ国内の世論には移民／難民の問題を、当時活動が活発だった「イスラーム国」などによるテロと結び付けて捉える声もあった。ドイツ南部のケムニッツでは 2018 年 8 月、難民受け入れをめぐり大規模なデモとカウンターデモが起きることとなった。

ケムニッツの難民受け入れに反対するデモで掲げられた横断幕（出典：AFP）

こうした政治動向はドイツの移民／難民受け入れ体制にも影響を与え、ベルリンでの現地調査では、当初は市の中心部にあった大規模施設が、次第に郊外の施設への移転が進んでいることが明らかにされた。シリア難民支援の市民運動は下火になり、移民／難民との交流の場を設け共生を目標とする活動は参加者がきわめて少なくなっていた。ドイツ人のみならず、アラブ系移民／難民の間でも参加へのインセンティブは低下し、常連メンバーの中でも離脱者が増えていく様子が観察された。シリア難民は移住後も世界各地に離散した親族との間で連絡を保っており、こうしたドイツでの受け入れ状況や社会の変化についての情報は、日常的なコミュニケーションの中で共有されていた。転換期を迎えた後のドイツは、経済大国としての魅力は維持するものの、移動の実現可能性が以前よりも低い国として捉えられるようになり、その後の移動を抑制する影響が及んだものと考えられる。

(3)経由地におけるアラブ系移民／難民の受け入れ状況の変化

同様の状況は、中東からの移民／難民の経由地であるバルカン諸国でもみられた。セルビアの首都ベオグラードでの調査では、新着難民の中でかつては大半を占めていたシリア難民の割合が激減し、それ以前から紛争が続くアフガニスタン出身の（自称）未成年の難民が NGO の主な支援対象となっている状況が観察された。国境から国境への難民の輸送に関する国際協調は終了し、むしろ各国が国境を閉ざす状況となったことで、移動の実現可能性が大きく低下したことが減少の理由と考えられる。（なおバルカン諸国での調査は当初は予定しておらず、セルビアで開催された国際研究集会参加の際に、機会に恵まれて実現した）

経由地であり、事実上最大のシリア難民受け入れ国であるトルコでは、難民人口の増大と滞在の長期化に伴い、トルコ市民権の付与による滞在の正規化や、就労許可の発出をめぐって提案がなされた。シリア国境地帯のシャンルウルファやガジアンテップでは、国境のシリア側（シリア国内）への支援を含めた活動にトルコの NGO が従事していることが聞き取り調査で分かった。これは、シリアの国内避難民をトルコへの入国以前の段階から支え、難民としての入国を未然に防ぐ目的とみられる。また逆の動きとして、2019 年 10 月には「平和の泉」軍事作戦でトルコ軍が

シリア北東部に侵攻し、国境地帯を占領した。その目的の一つとしてエルドアン大統領は、200万人の難民をトルコ国外の国境地帯の占領地域へ移住させる計画を掲げたが、国際社会からの支持は得られなかった。こうした動きは、EU-トルコ合意（難民の強制送還に関する国際協調）によりトルコ国内でシリア難民が滞留する可能性が高まったことに対するトルコの国内的（対外占領も含む）施策と捉えることもできる。

もう一つの経由国・滞在国であるレバノンでは、シリアのバッシャール・アサド政権を支持するヒズブッラーなどの主体により、2018 年の時点ですでにレバノン国内のシリア難民をシリアへ送り帰す準備がなされ、実行に移されていることが分かった。人口 680 万人程度のレバノンにとって、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）登録者数だけでも 80 万人を超えるシリア難民（実際には 100 万人超とされる）の受け入れは大きな負担である。ベイルート・アメリカン大学で開催されたワークショップでは、難民の滞在の長期化について、人材や労働力としての活用など様々な案や可能性が議論されていた。とはいえシリア難民受け入れをめぐる国際協調の終了に伴い、これらの経由国で先に進めず滞留する移民／難民の受け入れが、より大きな課題となっていることは明らかである。

(4)国際研究交流によるネットワークの構築

本研究課題は、研究代表者と研究分担者、研究協力者がそれぞれの専門とする分野や地域に関して調査を進める形で研究が進められた。その過程では、各国の研究機関とも積極的に研究交流を図った。ドイツ国内の研究機関との交流を通しては、イスラーム教徒の移民／難民受け入れに関する研究が、量的・質的調査の両側面においてシリア難民の受け入れ以前から進んでいること、そこに新たに加わったシリア難民についても、受け入れ地域の地域特性（それまでに移民／難民を多く受け入れていた地域か否か等）を踏まえた詳細な分析が進められていることが分かった。研究代表者が長期在外研究の際に籍を置いたフンボルト大学移民統合研究所（BMI - Berliner Institut für empirische Integrations und Migrationsforschung）はこの研究分野において特に先進的であり、研究者の日本への招聘により国内での研究交流も深めることができた。

またドイツで構築した研究ネットワークをもとに、2019 年度はアルメニアのエレバンでもシリア難民に関する国際ワークショップを共同企画で開催した。さらにトルコ東部での現地調査で築いた人脈に基づき、同年度はガジアンテップ大学で開催された大規模なシリア難民研究の国際研究大会にも参加した。

(5)新型コロナウイルスと人の移動の変化

2020 年初頭に始まった新型コロナウイルスの感染拡大は、移民／難民を含めた人の移動を一時的に大きく制限し減少させることとなった。難民キャンプに収容されたアラブ系移民／難民は、ヨーロッパ諸国での難民受け入れ審査が中断されたことにより経由国のキャンプでの滞在が長期化し、劣悪な環境に抗議してギリシアのレスボス島では難民キャンプへの放火事件が起きた。これらの移動の動態について、研究代表者らはそれぞれの立場で資料調査と研究を進めた。研究代表者はモリア難民キャンプの放火事件や、パレスチナ自治区からイスラエルへの出稼ぎ労働者の人権侵害の問題から、国家主権と移動主体としての移民／難民の関係について論じ、学会発表に基づき論考を刊行した。また研究分担者の森井と今井は、ポスト・コロナの国際協調のあり方と政策の変化、人の移動への影響などについて論考を刊行した。本研究課題は 2019 年度を最終年度に予定しており、執行期間終了間際の予想外の展開にやや翻弄される形にはなったが、上記の通り十分に研究成果を出して完了することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計36件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 錦田愛子	４．巻 131号
２．論文標題 「国家主権の外側にある者の危機――COVID-19禍におかれた移民／難民およびパレスチナ――」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『法学政治学論究』	６．最初と最後の頁 27-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森井裕一	４．巻 第50巻第12号（590号）
２．論文標題 「選挙後のドイツ政治」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『UP』	６．最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森井裕一	４．巻 5月号
２．論文標題 「欧州政治の行方とドイツの役割」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『修親』	６．最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 錦田愛子	４．巻 541号
２．論文標題 「諦めと期待の狭間で――関係正常化に対するパレスチナ自治区住民の反応」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『中東研究』	６．最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 昔農英明	４．巻 11
２．論文標題 「「人道的統治」と難民の階層化：ドイツと日本の比較から」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『難民研究ジャーナル』	６．最初と最後の頁 59-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 昔農英明	４．巻 3537
２．論文標題 「書評：クラウス・バーデ編集・増谷英樹監訳『移民のヨーロッパ史』」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『図書新聞』	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森井裕一	４．巻 57
２．論文標題 「ＥＵ新人事をドイツからみる」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『外交』	６．最初と最後の頁 104-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森井裕一	４．巻 625
２．論文標題 「理念と現実の狭間で揺れる独中関係」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『東亜』	６．最初と最後の頁 92-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森井裕一	４．巻 65
２．論文標題 「ポスト・メルケルに動き出したドイツ」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『外交』	６．最初と最後の頁 76-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森井裕一	４．巻 691
２．論文標題 「ＥＵと加盟国の課題」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『国際問題』	６．最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yutaka TAKAOKA	４．巻 35-1
２．論文標題 Experiences and Attitude toward Migration among Syrian Migrants and Refugees	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『日本中東学会年報』	６．最初と最後の頁 69-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高岡豊	４．巻 536
２．論文標題 「シリアの復興の現状と課題」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『中東研究』	６．最初と最後の頁 42-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦田愛子	4．巻 10
2．論文標題 「難民研究における人類学的アプローチの効用――スウェーデンとドイツのアラブ系移民／難民研究の事例から」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『難民研究ジャーナル』	6．最初と最後の頁 60-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kohei IMAI	4．巻 35-1
2．論文標題 “Why Syrian Refugees in Turkey Choose Turkey as a Final Destination: Results of Public Opinion Survey of Syrian Refugees in Turkey”	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Annals of Japan Association for Middle East Studies	6．最初と最後の頁 119-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 844
2．論文標題 「シリア難民の最大の受け入れ国、トルコをめぐる」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『青淵』	6．最初と最後の頁 18-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦田愛子	4．巻 2018年5月号
2．論文標題 「離散から70年――パレスチナ難民の帰還をめぐる思い」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『現代思想』	6．最初と最後の頁 180-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Aiko Nishikida	4．巻 731
2．論文標題 “Hamas's ascension and its international relations : literature review”	5．発行年 2018年
3．雑誌名 IDE Discussion Papers	6．最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Aiko Nishikida	4．巻 732
2．論文標題 "Hamas and the Gaza war of 2014 : developments since the Arab spring in Palestine"	5．発行年 2018年
3．雑誌名 IDE Discussion Papers	6．最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 錦田愛子	4．巻 なし
2．論文標題 「パレスチナ人58人が死亡したガザでの衝突をハマースの責任に転嫁するアメリカ」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ニューズウィーク日本版，2018年5月17日	6．最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 森井裕一	4．巻 なし
2．論文標題 「ドイツ連邦議会選挙の結果とメルケル政権の今後」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『21世紀政策研究所新書』	6．最初と最後の頁 113-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森井裕一	４．巻 14
２．論文標題 「メルケル首相とドイツ政治」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『現代史研究』	６．最初と最後の頁 175-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 髙岡豊	４．巻 532
２．論文標題 「エルサレム問題とイスラーム過激派の知的退行」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『中東研究』	６．最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今井宏平	４．巻 40
２．論文標題 「なぜトルコとアメリカの関係は悪化したのか」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『立教アメリカン・スタディーズ』	６．最初と最後の頁 123-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 今井宏平	４．巻 671
２．論文標題 「中東地域秩序にクルド人の居場所はあるのか」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『国際問題』	６．最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 66
2．論文標題 「際立つ民族主義者行動党の存在感」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『海外事情』	6．最初と最後の頁 55-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 194
2．論文標題 「『主権の空白地』の統治をめぐるせめぎ合い――イラクとシリアにおける『イスラーム国』とクルド人組織の活動を事例として」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『国際政治』	6．最初と最後の頁 46-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 6
2．論文標題 「トルコにおける2019年3月の地方選挙の展望」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『中東レビュー』	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦田愛子	4．巻 6号
2．論文標題 「なぜ中東から移民／難民が生まれるのか―シリア・イラク・パレスチナ難民をめぐる移動の変容と意識」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『移民・ディアスポラ研究』	6．最初と最後の頁 84-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 錦田愛子	4．巻 7/23
2．論文標題 「エルサレムでの衝突はどこまで広がるのか――パレスチナ・イスラエルで高まる緊張」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ニューズウィーク日本版	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 錦田愛子	4．巻 12/10
2．論文標題 「エルサレムをめぐるトランプ宣言の行方――意図せず招かれた中東の混乱」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ニューズウィーク日本版	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 2018年2月号
2．論文標題 「分析レポート：『保守的なグローバリスト』から『民族主義的な防御主義者へ？―公正発展党政権の政策変遷』」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『アジ研ワールド・トレンド』	6．最初と最後の頁 34-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 No.531
2．論文標題 「なぜトルコはカタルを重視するのか」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『中東研究』	6．最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 Vol. 5
2．論文標題 「ロシア軍機撃墜事件（2015年11 月）以後のトルコとロシアの関係」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『中東レビュー』	6．最初と最後の頁 40-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 今井宏平	4．巻 Vol.40
2．論文標題 「なぜトルコとアメリカの関係は悪化したのか」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『立教アメリカンスタディーズ』	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 昔農英明	4．巻 22号
2．論文標題 「ドイツにおけるトルコ系ムスリムの社会的排除―― 後期近代におけるナショナルな境界の再規定」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『三田社会学』	6．最初と最後の頁 111-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 昔農英明	4．巻 23号
2．論文標題 「難民をどのように統合するのか――ドイツの事例」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『移民研究年報』	6．最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計32件（うち招待講演　6件／うち国際学会　21件）

１．発表者名 Aiko Nishikida
２．発表標題 “Identity and Identification of the Syrian Refugees in Germany.”
３．学会等名 IPSA2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 森井裕一
２．発表標題 「EUのインド太平洋外交とドイツのリーダーシップ」
３．学会等名 日本国際政治学会、2021年度研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 今井宏平
２．発表標題 「中東・欧州・ユーラシア地域制度の関係とトルコ外交」
３．学会等名 日本国際政治学会、2021年年次大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 昔農英明
２．発表標題 「生体認証と人種主義―ドイツの移民管理を事例に」
３．学会等名 第4回生体管理史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 昔農英明
２．発表標題 「ドイツの難民受け入れをめぐる包摂と排除のポリティクス：交差するセクシズムとレイシズムについて」
３．学会等名 ワークショップ「西欧社会の難民受け入れをめぐる信頼のゆらぎ」
４．発表年 2021年

１．発表者名 Aiko Nishikida, Yutaka Takaoka, and Shingo Hamanaka
２．発表標題 The Circumstances and Challenges for the Return Migration of Syrian Migrants-Refugees.”
３．学会等名 European Social Science History conference (ESSHC) Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 錦田愛子
２．発表標題 「国家主権の外側におかれる者の危機――移民／難民およびパレスチナの権利をめぐって」
３．学会等名 日本国際政治学会2020年度年次大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Aiko Nishikida and Hiroyuki Aoyama
２．発表標題 “A Comparative Study of Dynamics and Perception of the Syrian Refugees.”
３．学会等名 The Global Syrian Refugee Crisis: Health and Socioeconomic Perspectives, Challenges and Opportunities（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aiko Nishikida
２．発表標題 “After the Crisis in 2015 Adaptation of Syrian refugees in Germany.”
３．学会等名 International Conference “Syrian Refugee Crisis: for Regional to Global Challenges.”（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aiko Nishikida
２．発表標題 “Multi-level support system and its appreciation by Syrian refugees in Germany.”
３．学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 錦田愛子
２．発表標題 「帰還をめぐる思い：シリア難民の移動に対する意識の比較分析Thoughts on Returning: Comparative Analysis of Perceptions of Migration among Syrian Refugees」
３．学会等名 日本中東学会第 35 回年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aiko Nishikida, Yutaka Takaoka, and Shingo Hamanaka
２．発表標題 "Comparative study of the dynamics of the Syrian refugees in Jordan, Turkey and Sweden"
３．学会等名 European Social Science History conference (ESSHC) Annual Conference 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Aiko Nishikida
２．発表標題 “Living Strategy of Transnational Families: The Effect of the Border Control on Migration to the EU countries”
３．学会等名 International Symposium“Border/Boundary Control in the Age of Transnationalization: Comparing Experiences in North America, E.U., & Japan”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 錦田愛子
２．発表標題 「離散により乗り越える分断――パレスチナ人の再難民化と国民国家」
３．学会等名 日本国際政治学会2018年度年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Aiko Nishikida
２．発表標題 “Prolonged Conflict and Multidimensional: approach to the issue of Palestinian refugees.”
３．学会等名 International Conference “Relational Studies on Global Conflicts- Toward a New Approach to Contemporary Crises”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Aiko Nishikida
２．発表標題 “New Boundary of Japanese Migration Governance”
３．学会等名 Turkish-Japanese Joint Research Workshop on Migration（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 髙岡豊
２．発表標題 「紛争下のシリアについての調査と課題」
３．学会等名 日本中東学会2018年度年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yutaka TAKAOKA
２．発表標題 "Experience and Consciousness of Migration among Arab citizen - Focusing on Syria"
３．学会等名 25th IPSA World Congress of Political Science（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yutaka TAKAOKA
２．発表標題 "Do Syrians in Turkey want to return? -analyzing survey to SuTPs (2017)"
３．学会等名 Turkish-Japanese Joint Research Workshop on Migration（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 "Kurdish Studies in Japan"
３．学会等名 World Congress for Middle East Studies 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 "Why Syrian refugees choose Turkey as a final destination -The quantitative analysis to Syrian refugees in Turkey"
３．学会等名 25th IPSA World Congress of Political Science（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 "Kinship versus Globalization? -Which is the predominant principle of moving for Syrian refugees"
３．学会等名 12th Pan-European Conference on International Relations（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 “Turkey's policies toward the forced migration: Past and Present”
３．学会等名 BIM (Berliner Institut fur empirische Integrations)-KAKEN joint workshop（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 今井宏平
２．発表標題 「シリア難民に対するトルコとEUの協調行動」
３．学会等名 日本国際政治学会2018年度研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 "The perception toward child education of Syrian refugees in Turkey"
３．学会等名 Turkish-Japanese Joint Research Workshop on Migration（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kohei IMAI
２．発表標題 "Ideas of intellectual circles during the interwar period and its contribution to non-Western IR: The case of Kadro movement in Turkey"
３．学会等名 60th ISA Annual Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Aiko Nishikida
２．発表標題 "Syrian refugees in Sweden Their struggle for adaptation"
３．学会等名 International Symposium “The Global Refugee Crisis: Mobile people under state protection or exploitation”（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Aiko Nishikida, Yutaka Takaoka and Shingo Hamanaka
２．発表標題 "Syrian and Palestinian Diaspora: Their Experience and Consciousness of migration"
３．学会等名 The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) Annual Conference 2017 ‘Continuity and Change: Diaspora, Religion, Kinship, Food, Art and Architecture.’（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 今井宏平
２．発表標題 「シリア難民の定住に向けた一考察―トルコの過去の難民受け入れとの比較研究―」
３．学会等名 日本中東学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 今井宏平
２．発表標題 「トルコの難民政策―ゲートキーパーの役割がもたらす光と影」
３．学会等名 日本比較政治学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kohei Imai
２．発表標題 “The agenda of Turkish naturalization for Syrian refugees-Dimensions of language and education-”
３．学会等名 Seminar of Bogazici University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yutaka Takaoka
２．発表標題 "Poll survey on Syrians in Turkey: Findings and Implications"
３．学会等名 Seminar of Bogazici University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計25件

1．著者名 錦田愛子、黒田賢治、保坂修司、鵜戸聡、新井和広、他	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 392
3．書名 『中東・イスラーム世界への30の扉』	

1．著者名 錦田愛子、今井公平、末近浩太、浜中新吾、他	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 264
3．書名 『教養としての中東政治』	

1．著者名 錦田愛子、小笠原弘幸、近藤信彰、守川知子、他	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 378
3．書名 『論点・東洋史学』	

1．著者名 Yutaka Takaoka, Masaki Mizobuchi, Raymond Hinnebusch, et. al.	4．発行年 2022年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 452
3．書名 Actors and Dynamics in the Syrian Conflict's Middle Phase Between Contentious Politics, Militarization and Regime Resilience	

１．著者名 今井宏平、森井裕一、坂井一成、八十田博人、他	４．発行年 2022年
２．出版社 日本経済評論社	５．総ページ数 326
３．書名 『世界変動と脱EU／超EU』	

１．著者名 今井宏平、川島真、池内恵、小泉悠、他	４．発行年 2021年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 192
３．書名 『UP plus 新興国から見るアフターコロナの時代：米中対立の間に広がる世界』	

１．著者名 森井裕一、岡部みどり、八十田博人、植田隆子、他	４．発行年 2021年
２．出版社 文眞堂	５．総ページ数 335
３．書名 『新型コロナ危機と欧州－ＥＵ・加盟10カ国と英国の対応』	

１．著者名 森井裕一、川島真、森聡、伊藤武、遠藤乾、他	４．発行年 2020年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 257
３．書名 『UP plus アフターコロナ時代の米中関係と世界秩序』	

1．著者名 高岡豊、浜中新吾、青山弘之	4．発行年 2020年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 316
3．書名 『中東諸国民の国際秩序観　世論調査による国際関係認識と越境移動の経験・意識の計量分析』	

1．著者名 高岡豊、末近浩太、山尾大、青山弘之、他	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 276
3．書名 『シリーズ・中東政治研究の最前線2　シリア・レバノン・イラク・イラン』	

1．著者名 錦田愛子、近藤敦、小坂田裕子、白川俊介、床呂郁哉、他	4．発行年 2020年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 288
3．書名 『政治主体としての移民／難民――人の移動が織り成す社会とシィティズンシップ』明石書店	

1．著者名 錦田愛子、川村千鶴子、他	4．発行年 2020年
2．出版社 東海大学出版部	5．総ページ数 276
3．書名 『インタラクティブゼミナール　新しい多文化社会論――共に拓く共創・協働の時代』	

1．著者名 錦田愛子、小泉康一、他	4．発行年 2019年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 408
3．書名 『「難民」をどう捉えるか――難民・強制移動研究の理論と方法』	

1．著者名 今井宏平、羽場久美子、川上泰徳、他	4．発行年 2021年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 416
3．書名 『移民・難民・マイノリティ ： 欧州ポピュリズム の根源』	

1．著者名 髙岡豊・溝渕正季編著	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 336
3．書名 『「アラブの春」以後のイスラーム主義運動』	

1．著者名 山口昭彦、青山弘之、高岡豊、今井宏平他	4．発行年 2019年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 352
3．書名 『クルド人を知るための55章』	

１．著者名 川名晋史、齊藤孝祐、高橋美野梨、小泉悠、堀場明子、福田毅、山﨑周、今井宏平、溝渕正季、東野篤子	４．発行年 2019年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 296
３．書名 『共振する国際政治学と地域研究』	

１．著者名 小笠原弘幸、穐山祐子、今井宏平、上野愛実、沖祐太郎、柿崎正樹、川本智史、田中英資、濱崎友絵、山尾大	４．発行年 2019年
２．出版社 九州大学出版会	５．総ページ数 324
３．書名 『トルコ共和国 国民の創成とその変容―アタテュルクとエルドアンのはざまで』	

１．著者名 松原康介、錦田愛子ほか	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 400
３．書名 『地中海を旅する62章――歴史と文化の都市探訪』	

１．著者名 移民政策学会設立10周年記念論集刊行委員会編（駒井 洋・柏崎千佳子・昔農英明・宮島 喬・柄谷利恵子・石井由香・錦田愛子ほか著）	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 296
３．書名 『移民政策のフロンティア――日本の歩みと課題を問い直す』	

１．著者名 石黒大岳編（石黒大岳・村上拓哉・ 堀拔 功二・白谷望・錦田愛子著）	４．発行年 2017年
２．出版社 アジア経済研究所	５．総ページ数 172
３．書名 『アラブ君主制国家の存立基盤』	

１．著者名 今井宏平	４．発行年 2017年
２．出版社 中央大学出版部	５．総ページ数 152
３．書名 『国際政治理論の射程と限界』	

１．著者名 Kohei Imai	４．発行年 2017年
２．出版社 Lexington Books	５．総ページ数 221
３．書名 The Possibility and Limit of Liberal Middle Power Policies: Turkish Foreign Policy toward the Middle East during the AKP Period (2005-2011)	

１．著者名 今井宏平	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 312
３．書名 『セキュリティ・ガヴァナンス論の脱西欧化と再構築』	

１．著者名 髙岡　豊、白谷　望、溝渕　正季	４．発行年 2018年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 240
３．書名 『中東・イスラーム世界の歴史・宗教・政治』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

http://meis.aa-ken.jp/?tribe_events=%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BC%9A%E3%80%80after-the-refugee-crisis-in-europe-the-case-of-germany
http://plekn.aa-ken.jp/sympo2017_hiroshima_J.html
https://bit.ly/2r0ST1s
https://bit.ly/2DkgX0T

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森井　裕一 (MORII Yuichi) (00284935)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	髙岡　豊 (TAKAOKA Yutaka) (10638711)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員 (12603)	
研究分担者	今井　宏平 (IMAI Kohei) (70727130)	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター中東研究グループ・研究員 (82512)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	昔農　英明 (SEKINOU Hideaki) (20759683)	明治大学・文学部・准教授 (32682)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計9件

国際研究集会 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 ‘The Global Syrian Refugee Crisis: Health and Socioeconomic Perspectives, Challenges and Opportunities	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 International Conference “Syrian Refugee Crisis: for Regional to Global Challenges.”	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 European Social Science History conference (ESSHC) Annual Conference 2020(postponed and held in 2021)	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 International Political Science Association 2020(postponed and held in 2021)	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 BIM (Berliner Institut fur empirische Integrations)-KAKEN joint workshop	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 NIHU「パレスチナ占領50年」企画連続国際シンポジウム＜広島＞	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 International workshop 'After the “Refugee Crisis” in Europe: The case of Germany'	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 International workshop '“Jews and the Center/Margin of the Contemporary Society”"	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
アルメニア	National Academy of Science of Armenia			
ドイツ	Humboldt-University in Berlin	BBZ(Beratungs- und Betreuungszentrum)		
セルビア	University of Belgrade			
カナダ	University of Ottawa			

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	Univesity of Exeter	Glasgow Caledonian University		